グローバル文化学環

2016 年度陸前高田実習報告会

被災地の未来、
私たちの未来

2 月 14 日

2016年度陸前高田実習（「地域研究実習Ⅱ」）報告会
主催：お茶の水女子大学文教育学部グローバル文化学環

被災地の未来、私たちの未来



日時：2017年2月14日（火）10：00～17：00

場所：お茶の水女子大学　共通講義棟2号館101

※写真右手奥に見えるのは新しい陸前高田商店街の中心となる建物（本年4月完成予定）

≪プログラム≫

午前：実習参加学生からの報告　司会：小林　誠（グローバル文化学環教授）

10：00～10：10　開会の挨拶・趣旨説明：小林 誠
10：10～11：40　実習参加学生の報告
11：40～12：00　全体討論

午後：ゲストスピーカーによる講演と討論　司会：三浦　徹（グローバル文化学環教授）

13：00～13：10　開会の挨拶・趣旨説明：熊谷 圭知（グローバル文化学環 教授）
13：10～16：00　講演
鶴木由美子（難民支援協会定住支援部コミュニティ支援担当）
「震災と『外国人』」
小田　隆史（宮城教育大学・防災教育未来づくり総合研究センター・准教授）
「東北と世界をつなぐ：グローバル防災・減災協働の意義」（仮）
佐藤　一男（米崎小学校仮設住宅自治会長・防災士）
「支えられるということ・支えるということ～陸前高田の6年間～」
16：00～17：00　全体討論

【参加申込み・問い合わせ】　参加自由（午後の部のみの参加も歓迎します）
※なお学外から参加される方は、氏名・所属・連絡先を明記のうえ、次のアドレスに申込みお願いします。グローバル文化学環　global@cc.ocha.ac.jp

本プログラムは、第3回国際学生フォーラム（2月8日～17日、グローバル教育センター主催）との合同で行われ、海外5か国7大学から学生を招いて実施されます。また2月13、15日各10時から、共通講義棟3号館104にて海外大学生による国際学生フォーラムが行われますので、合わせてご参加ください。

（1）実習参加学生からの報告

お茶の水女子大学グローバル文化学環では、東日本大震災を受けて直後の 2011 年より、「地域研究実習Ⅱ」として岩手県陸前高田市における復興支援実習を行っている。これまで 150 名程が現地に赴き、国際学生フォーラムでは活動の一環として実習報告会に参加させていただいてきた。お茶の水女子大学が東日本大震災とどう関わりその現実を報告し海外の学生にも伝えることがどういう意義があるか。小林誠教授の問いかけで報告会は始まった。



本年度は、まず報告会の前半プログラムとして、6 月実習グループ、7 月実習グループ、9 月実習グループ、11 月実習グループの 4 組の実習参加学生からの報告がなされた。

6 月実習グループは、災害後住居と街の復興についての調査報告を行った。例えば仮設住宅には多様な地域から人々が集まるが、音・プライバシーの問題はありつつもそこに親密なコミュニティ形成を行う姿がある。一方、新興住宅では同一地域出身者が集まるが必ずしも震災前のようには行かない。高層建築となる公営住宅では高齢者がエレベーターの使い方に慣れず引籠りを誘引し、コミュニティ希薄となりうる。高台移転は買い物や通院等に困る。総じて、住宅以外に町並みができないと復興とは言えず、また元に戻すことばかり考えず転機と捉えることが、あるべき方向として提示された。

7 月実習グループは、コミュニティ FM を題材に災害時におけるラジオの有用性と情報発信について調査報告した。震災時に主な情報源としての利用率が高かったラジオは普及率が高いメディアであり、疲弊時に読む手間無く情報を得られ、運営側のコストも安い。臨時災害放送局では実現できなかった自由度の高さや市民へ寄り添った存在になろうとの想いがコミュニティ FM 設立にはある。人件費や（国の緊急雇用補助が 5 年間しか使用できない）、著作権料（最新音源のコスト）で苦労している状況や、ラジオは揮発性メディアであるので情報を残すために Facebook や Podcast などと連動する可能性も紹介した。



9 月実習グループは、「桜ライン 311」の想いについて伝えた。津波到達ラインに植樹される桜の木は、津波によって奪われた命の記憶を刻む。実際に発生した津波は予測されたよりも高かったのであり、それよりも高くに逃げて欲しいという伝承の想いがある。起きてしまったことから如何に学ぶか。「自分ごと」と

して受け取り、備え、繰り返さぬように、被災地の外に居る私達は「拡大コミュニティ」として想いや学びを共有することを伝えることの提言、また不謹慎などと思う必要はなく「肩の力を抜いた関わり方でさらっと遊びに来て欲しい」との想いが地元の人々にあることを聴衆に紹介し投げかけた。

11 月実習グループは、内部者と外部者の関わりを取り挙げた。背景には行政の一面があり、行政はその継続的支援に問題を抱え、例えば被災者が移転した後のコミュニティ維持についての難しさは解決されない。ここに陸前高田で図書館を開き活躍する外部者を紹介し、「外から見た目線」が現地のアピールポイントに気付くことができる利点を紹介した。また内部者から外部者へのアプローチが取り組まれ、漁業のブランド化や食の観光資源としてのアピールなどがある。震災が起こるとコミュニティに変化が起こるが、私達は「思民」として繋がることの大切さがあるという提言がなされた。

国際学生フォーラムの参加者たちにとって、日本の被災地に学生自らの足で赴きその目で調査した現状と様々な問題提起に、大きな影響を与えられた報告会参加であったようだ。

2016年度　陸前高田実習報告会

2017年2月14日

暮らしに大切なもの
～震災後（しんさいご）の３つの暮らしの比較（ひかく）から～

有井志帆　高木美穂子　伊藤夏実　中釜美里
清水まどか　新保祐奈　小倉秋桜里

◆アウトライン

1.はじめに

2.仮設住宅（かせつじゅうたく）、高台移転（たかだいいてん）、
公営住宅（こうえいじゅうたく）の説明

3.聞き取り内容

4.わかったこと

5.まとめ

1.はじめに

- 震災（しんさい）から６年経った今、“暮らし”についての問題意識（もんだいいしき）は大きい
- 外部の人々が関わる、暮らしを形づくるための支援

⇒仮設住宅（かせつじゅうたく）と移転後（いてんご）の暮らしについての聞き取りを比較
…何が暮らしやすさを決定づけているのか？
今後の生活に大切なものは何か？

2.仮設住宅・高台移転・災害公営住宅の説明

● 仮設住宅（かせつじゅうたく）temporary housing
…災害によって住まいを失った世帯(せたい)向けの応急仮設住宅（おうきゅうかせつじゅうたく）。

● 高台移転（たかだいいてん）
…山林(さんりん)を切り崩すなどして高台に住宅地を作り、集団移転（しゅうだんいてん）してもらう事業。

● 災害公営住宅（さいがいこうえいじゅうたく）
…災害により住宅を失い、自力での住宅再建（じゅうたくさいけん）が難しい住民のために自治体（じちたい）が設置する公営住宅。

2.仮設住宅・高台移転・災害公営住宅の説明

	仮設住宅	高台移転後の住まい	災害公営住宅（賃貸）
利用期間	2年間 →東日本大震災では長期化		
住戸	狭く、画一的（かくいつてき）	戸建(こだて）住宅	集合住宅
決まり方	部落(ぶらく)はバラバラになることもある	部落ごと	抽選（ちゅうせん）

↑
被災者の仮住まいを迅速(じんそく)に建設する必要性

↑
落ちついて生活出来る恒久復興住宅としての役割
金銭的補助あり

3.聞き取り内容

● 仮設住宅について（米沢小学校よねさわしょうがっこう仮設住宅の例）

・仮設のときは音が気になってた。たとえば、隣の夫婦ふうふの音を子供がどう感じていたか。（佐藤一男さとうかずおさん）

・みんな一緒だから、寂しくないのよ
（集会所しゅうかいじょうのおばちゃんたち）

・よかったよ、楽しくて。じいちゃんばあちゃんもお母さんたちも一緒になって。
・買い物は仮設の時の方が便利。（仮設から高台移転たかだいいてんした菅原すがわらキヨ子さん）

・仮設ではカップラーメンの音や風呂ふろの音が気になることがあった。
（鶴亀鮨つるかめずしの親父さん）





右写真　参考：全労済ニュース　佐藤一男さん取材
https://www.zenrosai.coop/reconstruction/temblor/backnumber/07index.php

3.聞き取り内容

高台移転後の住まいについて

・今のご近所は元沼田（もと ぬまた）の人だからみんな仲良し。近所の人と声を掛け合う 。

・ここに落ちついて安心した。もう津波は来ないね。

・いつまでも仮設住宅いられないから。残ってる人に悪いのよ。みんな一緒に出れるんならいいけど。
（菅原キヨ子さん）

8



9

3.聞き取り内容

災害公営住宅での暮らしについて

・初対面の人が多い。親密な関係ではない。
・回覧板(かいらんばん)＊はポストに入れ、近所と顔を合わせない。
・カギがいつもあいていて気楽に話しかけられていた仮設の頃とは違う。
・体操やスポーツをする機会はある。立地(りっち)も便利。
(住民の丹羽房子さん)

・公営住宅は、なんで8階とか高いの？一人で出歩けない人もいる。不便だ。
・「さびしい」と言えない人は公営住宅に引きこもってしまう。
(震災後もご自宅に住み続けている、金野秀一さんご夫妻)

＊回覧板…circular notice 連絡文書などを挟んで地域コミュニティ内の家から家へ順番に回し、コミュニティ内に連絡事項を伝えるもの

10



参考：福島県郡山市大槻町HP　http://www.town.otsuchi.iwate.jp/gyosei/docs/2013081500022/files/46

11

3.聞き取り内容

● その他

・復興から福祉(ふくし)支援にシフトするべき。自立には福祉。そのボランティアは必要。
（「東海新報社(とうかいしんぽうしゃ)」 長谷川一芳(はせがわかずよし)さん ）

・高台移転は予定の8割以上できているけれど復興した感じにはならない。街並み(まちなみ)ができていないと。
(金野秀一(こんのしゅういち)さん)

12

4.わかったこと　①住宅以外の環境の不整備（ふせいび）

高台移転先（たかだいいてんさき）…津波（つなみ）が来ないことへの安心、
自分の家だという居心地の良さ

家を優先（ゆうせん）したため住宅以外の環境（商店街や病院など）は
まだついてきていない印象。買い物や通院に困っている 。

13

4.わかったこと　②地域コミュニティについて

【仮設住宅】

・住んでいる人たちの部落（ぶらく）*はバラバラ。部落の意識は強い。

・６年間の仮設住宅での生活。お互いに気軽に呼びかけ合う関係。

＊部落
…地域コミュニティの意。町がさらに分かれた、町内会レベルの小さな地域コミュニティ。

プライバシーの問題を
感じる人もいるものの、
親密（しんみつ）なコミュニティ

14

4.わかったこと　②地域コミュニティについて

【新興住宅】

新たなコミュニティをいちから作る…？

昔の部落ごとで集まって集落を形成。声の掛け合い、強い繋がり（つながり）。

しかし震災前の生活のようにはいかない部分も多い。
仮設住宅を懐かしむ声も。

15

4.わかったこと　②地域コミュニティについて

【公営住宅】

・エレベーターなど、家に慣れずに引きこもってしまう人

・住宅内で集まれる場所はあるものの、来る顔ぶれは固定

希薄（きはく）な
コミュニティ

⇒復興（ふっこう）ではなく福祉（ふくし）welfare の問題として取り組む必要性

16

5.まとめ

● 住居以外の街並みもできないと復興したとは言えない

● ５年という月日が強固にした、仮設住宅での絆（きずな）
→震災が発生してしまったからこそできた縁（えん）を大切にしていくこと

● 高台移転先での、部落ごとの地域コミュニティにいる人
↕
公営住宅、仮設住宅で周囲との交流が少なくなってしまっている人

⇒街づくりに加え福祉の問題が重要になってきている

● 分野横断的な解決策が必要

● 「これを復興する」という元に戻すことばかり考えず、転機だと捉えて、ぜひ好機となるようにしていってもらいたい

17

災害と情報

コミュニティFM局 FMねまらいん　87.5MHz



井上　真亜子
嶋岡　千紘
大熊　瑞穂
高田　実穂
青柳　里咲
黒沢　優子

アウトライン

りんじさいがい
- 臨時災害FMから、コミュニティFMへ

しんさいじ　ゆうようせい
- 震災時のラジオの有用性

とくちょう　かだい
- おおふなとさいがいエフエムの特長と課題

かつどう　もんだい
- FMねまらいんの活動と問題
- 私たちにできること

1. 臨時災害FMから、コミュニティFMへ

2011年3月28日：臨時災害放送局「おおふなとさいがいエフエム」設立

- 行政が発信する情報だけを放送
- 継続のために3ヶ月ごとに契約を更新しなければならない
- 県域局のコミュニティFMが放送する情報はローカルには対応していない

もっと地域住民にとって身近な情報を発信したい

2013年4月5日：コミュニティFM「FMねまらいん」設立

- 今野さん「誰かがリスクを負わなければイノベーションは起こらない」
- 災害情報を最優先し、地域住民の暮らしに密着した情報を幅広く放送

2-1. 震災時のラジオの有用性

ゆうようせい

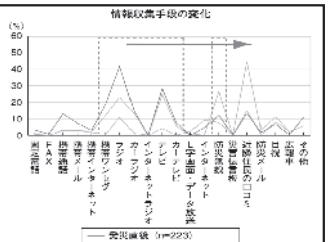
- 震災時の情報手段（東北）

震災直後、最も利用されるのがラジオ。

…テレビやネットが使えないとき、

無線のラジオが

唯一（ゆいいつ）の情報手段



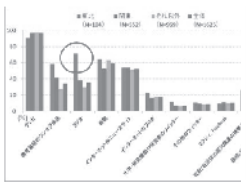
出典：http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h24/pdf/n3010000.pdf

2-2. 震災時のラジオの有用性

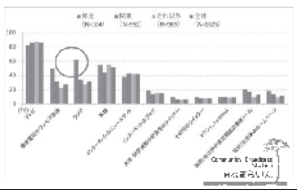
・災害関連情報の収集手段（地震速報/避難指示/交通状況/原発・放射能/食の安全）
東北ではラジオを使う人の割合が高い
一持ち運びができるラジオが好まれた

出典：http://www.soumu.go.jp/main_content/000160888.pdf

地震速報(じしんそくほう)



避難指示(ひなんしじ)



2-3. 震災時のラジオの有用性

表3　非震災地から他地域の災害に関する主な情報源・誰から伝えてほしいか

	主な情報源	誰から伝えてほしいか
標本数	451	451
ラジオ（震災のみAMかFMか）	61.8%	50.8%
家族	27.0	22.8
Eメール	26.0	11.1
携帯電話	13.7	2.9
行政・警察・消防署などからの情報	13.5	3.3
友人・知人	13.3	6.6
テレビ	8.1	8.9
おおふなとFMなどコミュニティFM	1.8	0.4
ツイッターやSNSなど	0.4	
ハザードマップ	2.9	1.8
その他	0.4	0.4
特にない	0.7	0.7
無回答		

出典：https://www.toyo.ac.jp/uploaded/attachment/8008.pdf

3. おおふなとさいがいエフエムの特長

- インフラが整っている
- 災害後即座に免足可能（免許手続きは口頭可）
- 開設した市町村が運営費など負担
- 設備（機材）などは国の補助金から無償貸与
- 放送局（東海新報社）→市役所(本局)→山（送信所）→市内へ
- 最優先は防災情報（パーソナリティ不在時は自動放送）
- 災害FMは大船渡市と陸前高田市に設置された

4. おおふなとさいがいエフエムの課題

「行政の広報のようであった…」

- 臨時、一時的な放送局
- 地震・津波にしか対応していない→大雨警報を放送できなかった
- 災害FMは市役所の発表する情報しか放送できない
- 「市政批判」につながる →お便り、メールコーナーをつくれない
- 「市民にとって必要な声が届かない」
- 個人名、個人情報は発信しない
- 「避難所、家族の安否を知りたかったのに」

→「行政に任せていたら伝わることも伝わらない！」

5. FMねまらいん、開局

- 岩手県大船渡市のコミュニティFM放送局(2013/4/5～)
  - 震災の影響で陸前高田市の行政が機能していない→大船渡市から発信することに。
  - NPO法人 防災・市民メディア推進協議会が運営・管理
  - 可聴エリア 大船渡市・隣接する地域
- 由来はこの地方の方言
  「ねまらい」＝「ちょっと座って休んでいきなさい」

“震災後頑張ってきた人達に心を休めてもらうために市民に寄り添った存在になりたい”



画像引用元URL:
http://www.mapion.co.jp/map/admi03.html



沿岸地方でリアルタイムで発信できるメディアがなかった。
地元密着の情報を発信する必要がある…！
誰かがリスクを負わなければ情報発信は進まない。
コミュニティFMの開局を決意。(今野さん)

6.みんなに普段から聞いてもらうラジオ

『市民』のための『市民』に向けた放送をつくるためには・・・

1 緊急時に、早く、正しい情報を。 災害時には信頼出来る様々な機関(市役所、警察、土木事務所、電力会社)の情報を最優先し、普段の放送では岩手日報・東海新報の配信する記事を放送	3 一般の市民DJを採用 市民の感覚を大事にした番組をつくる、聞く側に親近感をもってもらう、放送局の番組の制作費の負担を減らすことができる
2 生活に密着した内容を重視 給水車、おふろ当番、ガソリンスタンド、スーパーマーケットの特売情報、給食のメニューなど身近な情報を発信	4 イベント「ねまキッズDJ」を企画 夏休みの特別企画として地元の小学生およそ20人に職業体験の場を提供

7-1. FMねまらいんが抱える問題①

- 資金が足りない！
  しんけんひ　きんきゅうこう
  人件費→国の緊急雇用(emergency employment)は5年間だけ
  人手が足りない
  運営費の半分が補助金
- 著作権料→災害FMでは不要だった。
  最新のものを配信するお金がない
  （津波で流されたCD shopの古いCDを使っている）
- 震災時、スタジオ→市役所間の回線が切れてしまうリスクがある！
  →放送できなくなってしまう

7-2. FMねまらいんが抱える問題②

きはつせい

- ラジオ=揮発性メディア(Volatile media)
  →facebookやpodcastでも配信して記録を残している
- ラジオの強みとは？！
  →アプリを使えば全国で聞ける
  →アプリでの予約機能、スリープ機能
- 若者リスナーの減少　しょくぎょうたいけん
  →ねまキッズDJ（小学生に職業体験）
  →高校生もラジオに興味を持ち始めている

2017年2月1日現在
1923ダウンロード

スマートフォン用公式アプリ
『FMねまらいん of using FM++』

私たちにできることは…??

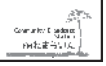
8. 私たちにできること

- 若者は持ってるの？
- ラジオが身近でない東京で、震災が起きたらどうするの？

＊非常時に、ラジオ

- 実際に東北では役立った。ラジオ＝有用性の高いメディア
- 電気やネット回線が途絶えたとき、私たちにはラジオがある
- SNSとの融合 → ラジオの可能性が広がる

★災害時に備えてラジオを身近なものにする意識を私たちから発信し、
実際の災害時にはラジオの活用を周囲に呼びかけよう！



参考資料

- 河北新報2016年3月28日「<災害FM>被災地相次ぎ幕　資金確保が壁」

http://www.kahoku.co.jp/tohokunews/201603/20160328_73012.html

- FMねまらいんfacebook公式ページ
https://www.facebook.com/Radioofunato/
- 株式会社スマートエンジニアリング　FM＋＋

https://fmplapla.com/fm-nemaline/



2017/02/14

2016年度陸前高田実習
―被災地の未来、私たちの未来

私たちと陸前高田の関わり



須崎情恵　西部みのり　水澤有奈

花岡瑞月　東出瑛江　道本千尋

1

目次（もくじ）

1. 陸前高田における伝承活動（でんしょうかつどう）
   (1)桜ライン311
   (2)鶴亀鮨
2. 私たちと陸前高田との関わり
   (1)虹のライブラリー
   (2)清水健太さんのお話
3. まとめ

2

1. 陸前高田における伝承活動（でんしょうかつどう）

3

(1)桜（さくら）ライン311



- きっかけ

「私たちは、悔しいんです。」

- 活動内容

津波の到達点を桜ラインでつなぐ。
（岩手県陸前高田市内約170kmに渡る）



- 目的

後世（こうせい）の人々に、津波の恐れがあるときにはその並木（なみき）より上に避難（ひなん）するように伝えていくこと。

4

(1)桜（さくら）ライン311
代表　岡本翔馬（おかもとしょうま）さん



- 活動のモチベーション
  - 「*今を生き切りたい*」
  - 「*震災があってよかったと思いたい。そうでないと意味がない*」



- 私たちの危機（きき）管理意識の低さ
  ➡備（そな）えの重要性
- 震災に対する地域の「温度差」
  ➡事実を知り、自分の口でシェアを

5

(2)鶴亀鮨（つるかめずし）　–「うったづぞ鶴亀！」

◎支援に対する感謝、震災の記憶を伝える活動

【味と人情（にんじょう）の鶴亀鮨 店主：阿部和明（あべ かずあき）さん】

- 手作りの感謝状の贈呈（ぞうてい）
- 被災体験の語り





➢被災当日

- 空から「バリバリ」という、大陸が裂（さ）けるような音
- 家が壊れた埃（ほこり）で空は真っ暗、青空も見えなかった
- どちらに向かって逃げるのか、1,2秒の判断で人生が変わっていた

6

➢避難所での生活

・食料支援があっても食器が不足していた

・食料の管理が困難、支援で届いたおにぎりが腐(くさ)っていたことも

➢これからのこと

陸前高田が復興(ふっこう)したら…

もっとたくさんの人に来てほしい

リピーターを増やしたい

そのためにお店をどのように残していくか？



知ること、伝えること、そしてつながりを大切にすること

7

2. 私たちと陸前高田とのつながり

8

(1)虹(にじ)のライブラリー(今泉天満宮)(いまいずみてんまんぐう)

虹のライブラリー：親子向け図書室(としょしつ)



震災直後(しんさいちょくご)

→不自由な中で今できることを

→それぞれが助け合っていた

多くの支援(しえん)*やボランティア*

→不足しているものと過多(かた)なもの

→自主性(じしゅせい)を失ったのでは…？



相手の立場で考えること

(2)清水健太(しみず けんた)さんのお話



➢不謹慎(ふきんしん)だからと、ふらっと遊びに来られない空気…「単純に遊びに来て！」

震災に分断されない陸前高田の未来のため、
外部者が単純に遊びに行けるような
適度に肩の力を抜いたかかわり方

10

3. まとめ

ここで見て聞いて学んだことを、
ぜひ、あなたの口からシェアしてほしい



●震災を「自分ごと」として受け取り、備(そな)え、繰り返さない

●「拡大コミュニティ」(Expanded Community)
：私たちは、震災のために共に戦ういち戦力

●私たちの口が拡声器(かくせいき)となって、シェアを

＊.＊ Thank you for listening ! ＊.＊



人とのつながりを考える
～内部者と外部者～



2017.02.14　2016年度陸前高田実習報告会

稲田陽音・佐橋ひなの・杉本優花・田村向日葵・
中村江里子・吉川絢子・吉村栞

目次

1. 内部者/外部者とは
2. 内部者同士のつながり
   i. 震災前のコミュニティを維持した人
   ii. 震災後、新たなコミュニティを形成した人
3. 内部者と外部者のつながり
   i. 陸前高田で活躍する外部者
   ii. 内部者による、外部者へのアプローチ
4. まとめ

1．内部者(ないぶしゃ)/外部者(がいぶしゃ)とは

内部者＝陸前高田の人々
（震災を経験した人）



外部者＝それ以外の人々



内部者同士のつながり

⇒2- ⅰ震災前のコミュニティを維持した人
2- ⅱ震災後、新たなコミュニティを
形成した人

内部者と外部者のつながり

⇒3- ⅰ陸前高田で活躍する外部者
3- ⅱ内部者による、外部者への
アプローチ

2. 内部者同士のつながり
i. 震災前のコミュニティを維持した人

- 佐藤直志(さとうなおし)さん
  - 震災で壊れた自宅を、元あった場所に再び建て直すことに強いこだわり
  - その姿は『先祖(せんぞ)になる』というドキュメンタリー映画に
- 菅野剛(かんのたけし)さん





2. 内部者同士のつながり
i. 震災前のコミュニティを維持した人

直志さん
「何もないけれど、二千円あれば10日くらいは生活できる。互助制度があるから。アワビとか牡蠣、ウニはお金がなくても食べることができる。長い付き合い、信頼関係があるから。」
剛さん
「いかに能力があっても協力できる人がいないと。みんなで生きるんだ。」
「みんな家を建てて前と同じ暮らしをしている。そこから次の世代につながる。仮設は自分たちの元となるのものがないから。」

→彼らの生活は、長い年月をかけて築き上げた信頼関係・助け合いによって成り立っている
→その関係を維持することは、は彼らにとって“当たり前”

2. 内部者同士のつながり
i. 震災前のコミュニティを維持した人

地域のスポーツクラブをつくり、移転した人たちとも交流しようとするが…

剛さん
「災害公営住宅は声がかけれない。この日に来てくださいと指定されると負担になる。」
「行政が邪魔をする。金があるから使わなきゃいけないから。でも単発のものばっかり。継続することが大事なのに。」

→移転した人とのつながりを維持することの難しさ
→震災前のコミュニティはより閉鎖的なものに

2.内部者同士のつながり
ii. 震災後、新たなコミュニティを形成した人

災害公営住宅の1階にある市民交流プラザ

- 阿部裕美さん

市民交流プラザの運営に携わっている

→震災後の新しい
　コミュニティ形成に貢献



2.内部者同士のつながり
ii. 震災後、新たなコミュニティを形成した人

一方で・・・

メンバーの固定化

いつもいるメンバーが決まっている。
いつも来ている人が顔を出さないと心配になる。
市民交流プラザに来ない人たちとの関わりがない。

メンバー内の男女比

交流プラザには女性よりも男性が多数。
女性同士ならば部屋を行き来できるが、男性はそれができない。

3.　内部者と外部者のつながり
i. 陸前高田で活躍する外部者

＊図書館員の方

・2016年4月長崎県より陸前高田へ
・陸前高田らしい図書館づくり、復興においてできることをしたい
　→井戸端図書館、お祭り、コンサートなど

＊陸前高田市役所観光交流課観光交流係　武田さん

・2016年4月島根県より陸前高田へ
・「外から見た目線」を大切に活動
・陸前高田と震災は切り離せない関係
　→どのように活用していくか



3.　内部者と外部者のつながり
ii. 内部者による、外部者へのアプローチ

■牡蠣養殖業者　佐々木学さん
米崎牡蠣をブランド化、発信

消費者と生産者のつながり
広田湾と米崎、陸前高田を結びつける
米崎牡蠣と生産者を紹介してもらえるような
飲食店との太いパイプ

外部者との交流
ブルーツーリズム
フリーペーパーの発行
海の楽しさを知ってもらいたい



3.　内部者と外部者のつながり
ii. 内部者による、外部者へのアプローチ

■飲食店　陸丸

「ホタテとワカメの炙りしゃぶしゃぶ御膳」
食の観光資源
食べて語ることの重要さ
数々のこだわり
このメニューで儲けようとは思っていない





外部からの支援は必要
残っている人、強い思いを持っている人
の背中を押して欲しい

4．　まとめ

震災後　人々は場所（土地、家、人間関係）を失う

◎コミュニティや人と人とのつながりが大きく変化
　内部者同士の考え方の違い
　外部者が多く関わるようになる

◎私たちと陸前高田のつながり
　協力する外部者＝**思民**　になる


Thank you for listening!

お茶大「地域研究実習」(陸前高田実習)
Our Fieldwork Practice in Rikuzentakata in 2011-2016

わたしたちは何を学んだか,わたしたちに何ができるか
What we have learned and what we should give back?

「被災地の未来、私たちの未来」
震災フォーラム&陸前高田実習報告会
2017。2。14。 お茶の水女子大学

熊谷 圭知 Keichi Kumagai
(お茶の水女子大学)

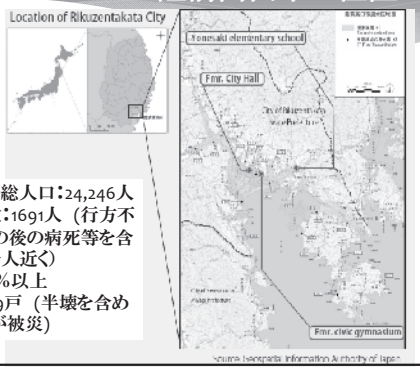
三陸地方:津波の常襲地
Sanriku region: Tsunami hit area

- 三陸地方:繰り返し、津波に襲われてきた歴史
- 1896 明治三陸津波 (死者2万2千人)
- 1933 昭和三陸津波 (死者1500人)
- 1960 チリ地震津波 (死者142名)
- 2011 東日本大震災(平成三陸津波)
(死者15,889名、行方不明2,594名)





陸前高田市の位置



震災時の総人口:24,246人
死亡者数:1691人 (行方不明者・その後の病死等を含めると2千人近く)
人口の7%以上
全壊3,159戸 (半壊を含め3,368戸が被災)

「陸前高田実習」構想の経緯と内容
Contents of our fieldwork course

- 10月~「地域研究実習」としてスタート(12月、翌年2月)
- 引率教員1-2名、TA(固定)1名+学生5~6名
- 往復夜行バス利用。陸前高田滞在は中3日間。
- 現地訪問:米崎小学校仮設住宅集会所=拠点(ホーム):仮設住宅住民との「お茶っこ」会、夏祭りなどイベントの開催、市役所他からの聞き取り
- 月1回程度の参加者全員のミーティング:現地訪問をした学生の報告会を共有=事前学習
- 最後にシンポジウムでの報告(3月)。報告書の編集・刊行(翌年度中)

実習の課題 Our Task

- 実施当初・1年目の課題
- ①宿泊施設、交通の便、安全の確保 ⇒夜行バス使用、2年目からはマイウス(自動車学校合宿施設)の利用で軽減
- ②被災者から話を聞くこと:許されることなのか?
- ③苛酷な体験をした方々に対する外部者のふるまい?
- ⇒「問わず語り」を聞くことに徹する(こちらから問い質さない)
- ⇒実際には、仮設住宅の住民(女性たち):積極的に体験を話してくれる⇒遠方から来た学生へのもてなし?
- ⇒訪問を重ねる中、信頼関係生まれる⇒佐藤一男さんから、お茶大の学生に「津波からどう逃れたか」の体験の聞き取りを依頼される⇒2年目は聞き取り中心の実習に

米崎小学校仮設住宅
Yonesaki Temporary Housing Area





集会所での聞き取り（2012年7月）
Interview at the center in Yonesaki temporary housing area



仮設住宅での聞き取り（2012年9月）
Interview at a temporary housing Unit



漁協（脇ノ沢漁港）での聞き取り
Interview at Fisheries Cooperative
（2012年11月）





＊ 目の前で肉親を流される、
など重い話も受け取る…

集会所での「お茶っこ」会（2014年6月）
A Tea Party (*Ochakko*) at Center of the Yonesaki Temporary Housing Unit



出来上がった報告書を眺める米小仮設住宅の人たち（2014年2月）
Residents reading our report



仮設住宅におけるジェンダー差
Gender difference found among the residents' attitudes

＊ （年配の）女性：仮設住宅の周囲に花を植えたり、集会所に良く集まり、コミュニケーション

＊ （年配の）男性：それぞれの家に引きこもりがち







嵩上げによる市街地再建と失われた風景への愛惜 attachment to the lost landscape


2014年2月


2016年11月


被災前の市街地の写真を示しながら町案内する紺野文彰さん（2014年6月）

フィールドワーク実習の成果と課題 result of fieldwork practice at Rikuzentakata

- 「フィールドワーク」（わたしの定義）＝調査者が、調査対象の存在する場所に身を置き、（文献や統計等では得られない）一次資料を集める調査方法
- 調査対象の存在する場所に身を置く⇒単なる「手段」ではない　理解したいという切実な動機づけと理解のための文脈を与える
- 実習を通じた陸前高田という「場所」の体験⇒学生たちにとって大きなもの（様々な出会い・温かさに触れる／ショックを与える）⇒教育効果：大
- 語り手としての陸前高田の人びと＝テンションが高い（伝えたいという熱意）
- 風景を見る、美味しいものを食べる…⇒「場所」を五感で味わう
- 来崎小学校仮設住宅集会所という場所（ホーム）の存在＝「お帰りなさい」と迎えられる
- お世話になった陸前高田の人びとに何を還せるのか？　⇒実習に参加した学生にとっても、教員にとっても共通の課題　⇒「外部者」の役割とは？

外部者が静かに「耳を傾ける」 Listen quietly to the voices in the disaster area

- 2012年度報告書の反響の大きさ『東海新報』2014/2/22報道→地元図書館からの寄贈依頼
- コミュニティの減退の中で、外部者が通い続けることの重要性。リレー式の実習

⇒「お茶大の学生がまた来てくれた」と迎えられる

6年間参加学生150名（学部学生約2千人のうち）

陸前高田を好きになり、自ら再訪する学生も多数



「内部者」とは誰か？ Who are the insiders?

- **「被災者」＝震災で被害を受けた人**（住宅を失う、家族・親戚・友人・知人を亡くす…）
- **陸前高田に住む人びと＝すべてが「被災者」**
- 一方で、家を流されていない人＝「在宅者」という区別と「負い目」
- 自分は家族を失っていないから、あの人に比べればまし…
- ⇒震災を機に地域社会の中に微妙な線引きが生まれる＝**被災者・内部者もけっして一枚岩ではない**
- 震災を機に**人口流出が加速化**⇒他出者と「内部者」の関係も揺らぐ
- 一方でUターン者も存在
- さまざまな意味で、**地域社会／共同体に「すきま」「揺らぎ」が生じている**（井手・佐藤報告）

「外部者」としての私たちの役割 Our task as the outsiders

- **私たちは被災した「当事者」ではない**
- しかし自然災害が頻発する日本ではいつでも「当事者」となりうる可能性
- 震災**被災者のニーズ**needs**とは？**⇒広義の**「復興」**（単なる復元ではない）
- 産業、公共施設、商店や市街地、住宅・・・可視的で、経済的・物質的なもの
- 精神的ストレスを含む健康、コミュニティの社会関係、愛着と帰属意識の対象となる風景や風土…心理的、社会的なもの⇒定量化、可視化されにくい。
- そうしたニーズ⇒行政だけが客観的に規定し、与えうるものではない
- **当事者と外部者との相互作用の結果、当事者と地域に現れる「ニーズ」**⇒その生成に貢献し、それに対して**責任をもちつつかかわり続けていく**こと



（2）ゲストスピーカーによる講演

～鶴木 由美子（難民支援協会定住支援部コミュニティ支援担当）～



鶴木氏からは「災害と多文化共生」と題してお話を頂いた。災害が起こりうる日本で、なにが今、問題か。日本は難民を受け入れない国だが、支援体制はある。難民というのは refugee（避難者、難民）であり、避難者という意味では日本の被災者も同じである。日本にいる海外の方の問題は発生し、例えば日本に嫁ぎ、津波災害で夫を亡くし母子だけが残ったケースは多い。そうした母親が仕事を得る支援として介護資格をとる支援などを行っている。熊本地震は四月に日本に来たばかりの留学生には、日本のことをどうしたらよいかわからないうちに起きた震災である。こうしたときに、外国人対応体制や普段のネットワークがしっかりしていると即戦力になる。熊本地震では外資系ホテルのネットワークが、被災時にハラルフードのみしか食べられないイスラムの方に対応ができた。災害時には悩み事が掛け算になり、普段の悩みが増幅する。例えば DV を受けている女性が避難所に行かなくてはいけない、となる。多文化共生は海外文化だけではない。避難場所に集まる人々は障害、LGBT、子供連れなど多様であり、この多様性を考えることが大事であるという考えを述べられた。

～小田 隆史（宮城教育大学・防災教育未来づくり総合研究センター・准教授）～



震災を「自分ごと」「我がごと」と捉えてもらうにはどうしたらいいかというスタンスで、小田氏は活動を続けてきた。

冒頭では東北大震災での状況を紹介し、児童は教室が使えないので避難所に区切られた教室スペースで勉学を余儀なくされたことや、大川小学校の例ではハザードマップ上では危ないと指定されていなかったが、74/108 名の児童と 10/11 名の教師が犠牲になったことを振り返った。

震災以降の取り組みも紹介された。在籍する宮城教育大学では学生ボランティアが被災地に赴き、普通の先生に話しができないことも被災者が話せる状況を産む。被災地ではハード面での工夫も行われ、校舎に施錠されている時でも屋上に避難できるように、仙台市では鉄骨の階段を学校の側面に作り、災害時には子どもでもドアを破って階上に逃れられ

る。そして屋上フェンスには各クラスの指定場所を表示しておき、何かあったらそこに集まれるよう工夫がある。また人事異動で遠方から来ている教師は地域のことを知らないが、学校と地域の連携が必要である。

被災地の人々は大変な想いをしたが、被災を伝承しても単に「頑張っているんだね」という受け留めで終われば、語る意味は半分のままである。「我がごと」化をして次なる災害に経験が生きるよう（未）被災地にどう広めて協働し、防災行動へ動機付けをするか。自分達は拡声器であり中継という役割であることを述べた。

～佐藤 一男（米崎小学校仮設住宅自治会長・防災士）～



佐藤氏は、避難所の現場に携わってきた立場で、指摘を述べられた。震災から五年を経たとき節目と言われたが、被災地にとって五年は節目ではなく、復興はまだまだ終わらない。財政的にも自主財源を多く失っているのに、復興支援と比べ福祉支援は自分達で負担しなくてはならない状況がある。東北大震災での地震は 3.11 で終わらず連続的なものであり、地震による精神的被害が続いていたことは覚えていて欲しい。

支援の形には、次に同じ目に遭わないよう改善されるべき問題がある。例えば、支援物資は時間を問わず届き、それは疲れ切って寝ている被災者に届く。消費を急ぐ食糧と物資が混在して届けば仕分けが必要であり、被災者が行わなくてはならない。物資は時に場所を占めるが、被災地ではひとりひとりのスペースが限られている。また支援格差の問題などがある。戴く側というのは発言が難しく、支援側は同じ立場に立って想像をする必要性がある。物流は停まっていない被災地に支援物資が届けば店は潰れてしまうし、ニーズに対応していない物資が届けば勿体ない。こうしたところに情報把握の大切さがある。また支援してくれる人がいなければ支援は始まらず、ここに受け取る体制がしっかりしていないと問題は発生する。支援と受援、そして仲援の考え方の必要性がある。途中で受け取った行政が困った例もある。支援を調整・仲介する体制がなければ支援は滞るのである。

被災地には、被災地でなくなることで忘れられるという恐怖がある。繋がりを継続し、また万が一のときに被災しないで下さいというのが、被災した人間全ての願いである、と述べられた。

陸前高田実習報告会
お茶の水女子大学文教育学部グローバル文化学環
第 6 回 世界 13 大学合同国際学生フォーラム
災害と危機管理ーグローバルなネットワークの構築にむけて

東北と世界をつなぐ
グローバル防災・減災協働の意義
ー防災の「わがこと」化のためにー

小田 隆史

宮城教育大学
附属防災教育未来づくり総合研究センター
（お茶大 陸前高田実習担当講師：2011～）

自己紹介

小田 隆史（おだたかし）

宮城教育大学
附属防災教育未来づくり総合研究センター

福島県いわき市出身
大学・大学院は仙台、途中　米国で留学・勤務

専門　地理学

2005年4月　外務省専門調査員（在サンフランシスコ日本領事館）
2010年3月　博士課程修了
2010年4月　お茶の水女子大学 地理学教室PD研究員～助教
2013年4月　宮城教育大学　教育復興支援センター

おはなしの流れ

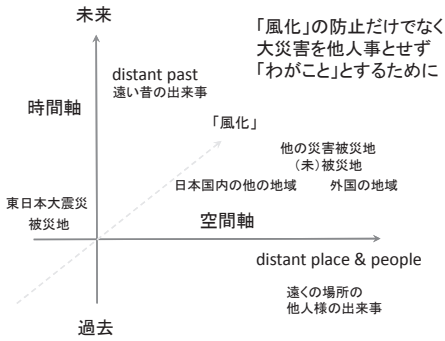
- 東日本大震災～個として研究者として

- 東日本大震災と学校
- 学校の防災教育，防災管理
- 教育復興支援
- 教員養成・研修

ローカル・スケール

- 海外の災害被災地の地誌
- （未）被災地間協働の意義
  - 海外での防災教育実践
  - 防災の「わがこと」化のために

グローバル・スケール



東日本大震災
私にとっては最初から
わがこと

福島県いわき市
広大な面積ー海と山、「東北の湘南」　「災害とは縁がない」？地域





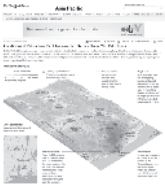
地理学研究者としての実践





2011年5月 日本地すべり学会調査団





東北地理学会東日本大震災報告集

2011年12月6日付 The New York Times





サンフランシスコ
日米タイムズ２０１１年４月７日号



東日本の被災地の学校でどんな経験をしたのか？

東日本大震災と学校

＝私が特にグローバルに発信する内容







東日本大震災による学校関係の被害

学校園の人的被害（死者・行方不明者）
児童・生徒　617人
園児　5人（岩手）、64人（宮城）3人（福島）

学校建物崩壊による死亡事案　なし（落下物で児童生徒負傷）

学校施設の被害
北海道～和歌山　22都道府県　7，988校
公立学校（幼小中高特支）　6，284校

このうち大きな被害　193校（全面建替・大規模復旧）
学校の敷地まで津波が到達した学校　131校
内　113校　児童生徒が在校していた学校
避難先　校舎上階や屋上（35%）、裏山や高台（32%）、指定避難所（31%）
内　53校・HM浸水予想学校、69校域外、不明無回答9）
新耐震建造物にはほとんど被害なし、旧耐震に被害目立つ

避難所運営
避難所として使用された学校　622校（3/17ピーク時）



旧いわき市立豊間中学校

石巻市立大川小学校の惨事

108人中74人の児童が犠牲
11人中10人の教師が犠牲

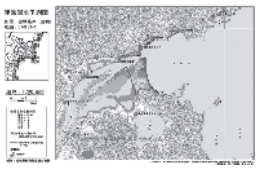




表1　福島県から県外への避難者の状況（2012年1学期）（人）

順	子ども		順	総数	
1	山形	1,709	1	山形	2,261
2	新潟	1,284	2	新潟	2,021
3	宮城	1,015	3	宮城	6,440
4	埼玉	1,007	4	東京	4,221
5	東京	1,001	5	埼玉	3,914
6	神奈川	661	6	千葉	3,155
7	茨城	608	7	茨城	2,733
8	栃木	521	8	神奈川	2,514
9	北海道	505	9	北海道	2,467
10	千葉	498	10	栃木	1,872
11	岐阜	390	11	岐阜	1,207
12	秋田	295	12	秋田	1,025
13	大阪	261	13	愛知	1,013
14	静岡	191	14	大阪	961
15	愛知	187	15	静岡	851
16	富山	165	16	福井	811
17	長野	165	17	富山	747
18	福井	155	18	山梨	712
19	山梨	144	19	長野	691
20	沖縄	133	20	島根	615
21	島根	130	21	兵庫	577
22	兵庫	130	22	鳥取	555

子ども（18歳未満）の避難者数（2012年1学期）は、2012年5月1日現在の住民基本台帳人口（総務省統計局）をもとに作成

福島原発事故による県外への避難者数

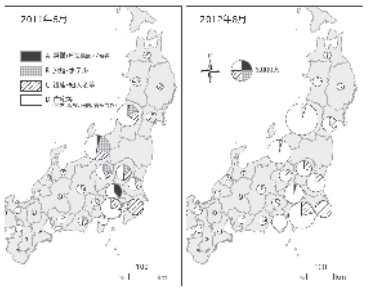


図2　福島県外への避難者数（避難先都道府県・市区別）

原発事故以降の福島県の教育

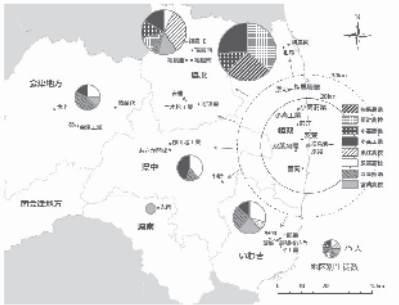


図7　リテライト高校と広域が所在する地区別生徒数（2011年度）

2011年4月19日付　各高等学校長宛文部科学省初等中等教育局長通知をもとに作成

教育復興支援

宮城教育大学の教育復興支援

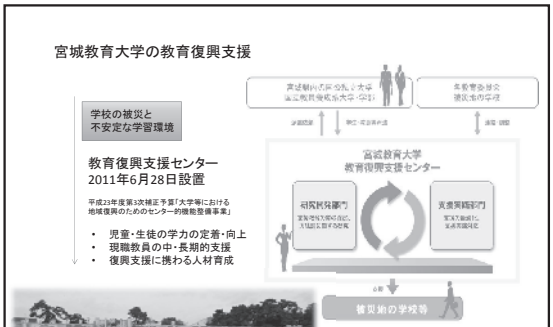
学校の被災と
不安定な学習環境

教育復興支援センター
2011年6月28日設置

平成23年度第3次補正予算「大学等における地域復興のためのセンター的機能整備事業」

- 児童・生徒の学力の定着・向上
- 現職教員の中・長期的支援
- 復興支援に携わる人材育成





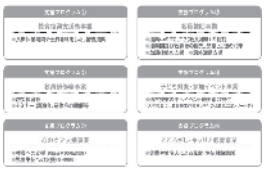


学習支援ボランティアの要請と派遣

これまでに

延べ約5,000人をこえる大学生ボランティアを学校等に派遣

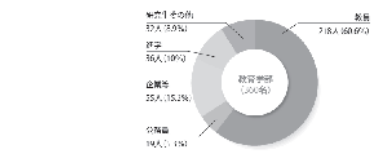
他大学との連携
県内：東北大、東北学院大
県外：北海道教育大、愛知教育大、
奈良教育大、早稲田大、鹿児島大等



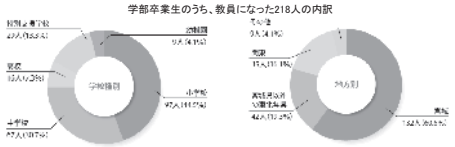
平成24年度　宮城教育大学卒業生の就職状況

（H25.5.1時点、宮城教育大学キャリアサポートセンター調べ）

地元志向、被災地出身者も多い



学部卒業生のうち、教員になった218人の内訳



校種別　　地方別

学校の防災教育・防災管理の展開

地域の“学校”の拠点性、役割が見直されている
- 地域の避難所として
- 復興における子どもたち・地域の拠り所として

「大川小学校事故調査報告書における提言」

震災の教訓を踏まえ、教員養成大学に対し、“子どもたちの命を守る任務に関わるために、防災を教職課程の基礎教育又は教養教育の必修科目と位置づけ、教員が確実にこれを学ぶことのできる環境の整備”を求めている。

文科省・教育委員会等に “教職員に対する防災・危機管理研修の充実”を要請

どう、サービスラーニングとして活用出来るか
被災地への近接性とリソース

教員養成・研修

宮城教育大学附属
防災教育未来づくり
総合研究センター

3つの機能をもった新センター

宮城教育大学
教育復興支援センター

第1の機能：防災教育の体系化・運用

教育：復興教育の運用

学部 ■原理・教育の方法と教材

大学院 ■実践的研修
学校における防災・安全管理システムとその運用に関する研修、附属学校の校内研究体制を活用した実践的研修

第2の機能：本学研究センターと附属学校を活用した新しい防災教育の開発研究

研究：教育システム開発と実践的適応

■本学附属研究センター協働研究
教材・人材を活用した地域創成教育システム（人材育成）の開発
国際理解に基づくグローバル支援（調査研究、情報収集と発信）

■附属学校園等との協働研究（実践適応）
教育システムの実践的検証・高度化・機能化

第3の機能：地域のニーズに対応した機動的・発展的支援

地域支援：復興教育・地方創成への支援

■東北における中心拠点
学生ボランティア、アクティブラーニング、サービスラーニング支援



教育復興支援ボランティアを通じた学生の育成

被災地視察研修
事前・事中・事後の指導
多くの学生が将来、教師になることを志す
～学校現場とのかかわることの意義



ボランティア不安解消会

ハード面（施設等）での学校防災
学校防災管理の改善・充実

仙台市立岡田小学校　津波避難用階段　（2016年7月 JICA学校防災集団研修）



仙台市立岡田小学校　ソーラ発電（避難所を想定して体育館へ送電・配電切替）



仙台市立岡田小学校　安否確認用プレート（クラス別）



仙台市立岡田小学校　安否確認用プレート（地区（集落）別）





学校と地域の連携による防災

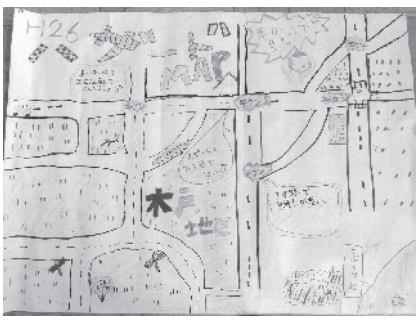
事例：　宮城県・大崎市立沼部小学校　保護者の教諭向け夏休みワークショップ（2015.07）







沼部小学校でのハザードマップづくり



楽しんでやっていることが、よくわかる
ハザードにくわえて、リソースもいれて
安心・安全（セーフティ）マップにしたらどうか？

宮城県・大崎市立沼部小学校　保護者の教諭向け夏休みワークショップ
ハザードマップ～安心安全マップ

災害時にリソースとなる（役立つ）ランドマーク

- 指定避難所
- 交番
- 消防署
- お医者さん（兼・自宅）
- 看護師さんの家（個人情報注意）
- 薬局・薬店
- 消防団・水防団詰所
- スーパー
- ホームセンター

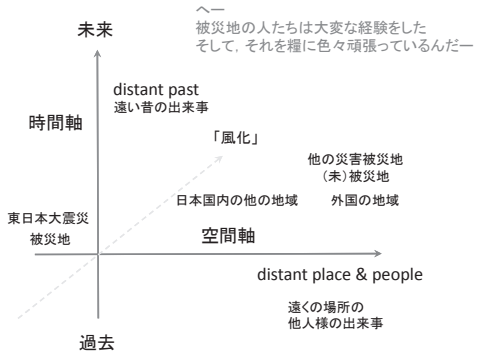


気になる自然災害と関係しているかもしれない
漢字が含まれる場所・地名・固有名詞等を書き出してみる

正解かどうか、わかりません
→郷土史・地名事典などから調べる

津波 ---------- 浪分神社
潮岬高校
・
・
・

→ 小学生、中学生・・・地域学習や漢字学習にもつながる（はず）



国内・海外の（未）被災地との協働
「先輩」・「後輩」関係の連続

他の地域を知る、想像することにもつながる
地理（学）的想像力geographic imaginationの喚起

「わがこと」化

防災行動への動機付け

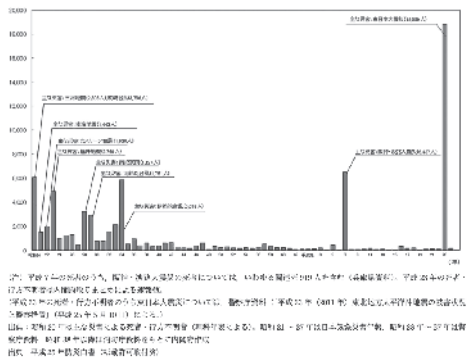
（未）被災地間協働
東北←→世界

矢印は両方向

- 海外被災地の防災の実践に学ぶ
- 阪神淡路大震災と東日本大震災の教訓知見を踏まえた防災実践の発信



日本における自然災害



日本人の記憶から風化した遠い外国の，遠い昔の大災害

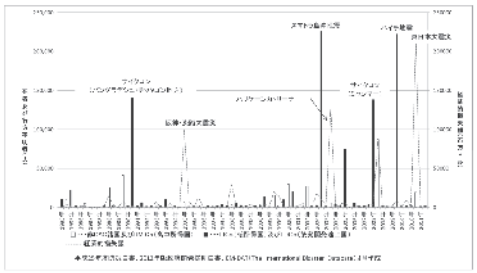


図2　1865 年以降，世界で発生した主な災害の死者・行方不明者数と経済損失額
平成 25 年度防災白書，2012 年度版新興発信動向書，EM-DAT(The International Disaster Database)より作成

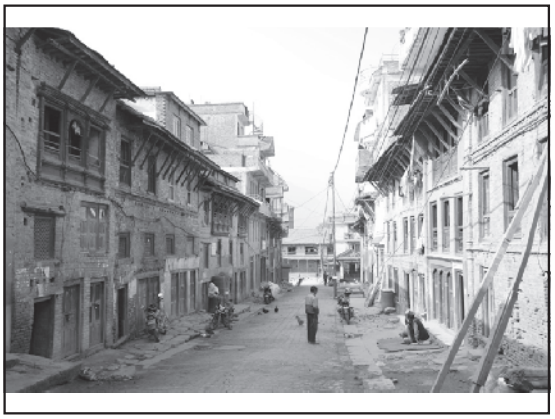
途上国において近年犠牲者が多い vs 先進国における経済的損失

海外の災害被災地の地誌に学び
「わがこと」として想像する

未来を担う子どもへの想いは同じ
ネパール地震（4月25日土曜日発生）
2015年12月・東北大学合同調査団　カトマンズ郊外コカナ村訪問



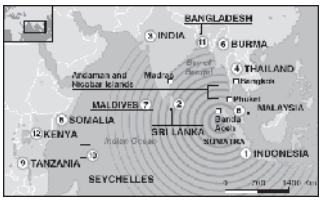


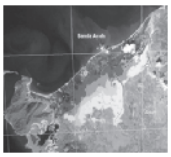




スマトラ大地震で最大の被害：
インドネシア・アチェ州バンダアチェ市

- 2004年12月26日　現地時間07:58
- インド洋沿岸に巨大な地震津波
- 死者・行方不明者　約22万人
- インドネシアで被害が大きかったアチェ州
- バンダ・アチェ市



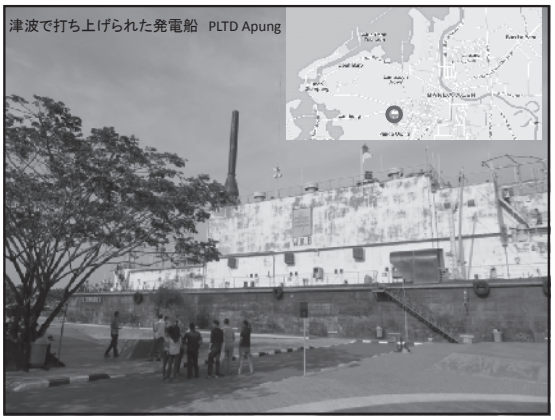


Source: BBC News Jan 5, 2005

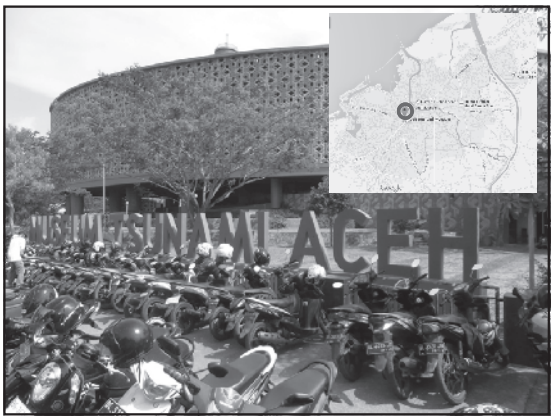




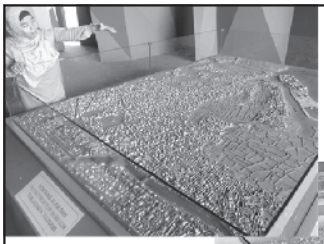
津波で打ち上げられた発電船　PLTD Apung



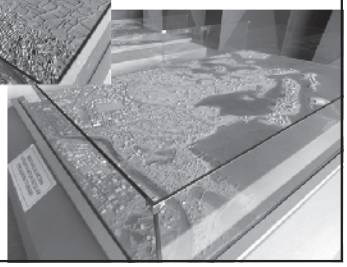




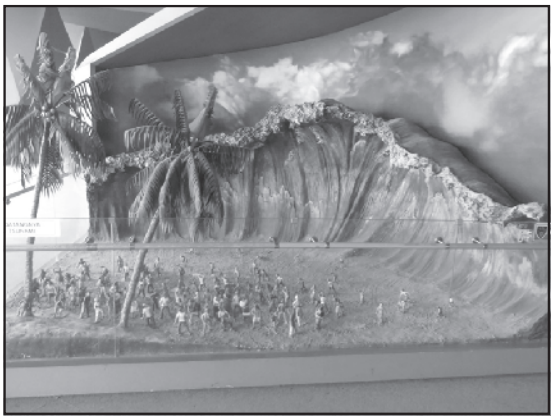




スマトラ地震から12年



- 多くの子供達は津波の経験・記憶がない
- 外部機関に依存過多の防災教育～衰退
- 伝承＋次なる災害への備えに課題



海外の災害地誌・実践から何を学べるか？

東北の実践へのフィードバック

実践例

独立行政法人国際協力機構（JICA）受託事業
諸外国教員・教育行政官集団研修



陸前高田市「奇跡の一本松」（2013年11月）



気仙沼市立小原木中学校の「海抜表示プロジェクト」を学ぶ（2013年11月）



陸前高田市の仮設住宅を訪問しての国際交流祭（2013年11月）

世界の教育関係者への防災啓発



女川中学校（宮城県女川町）を訪れたタイ教育省・校長研修一行（2014）

JICA国際協力機構×お茶大×宮城教育大
教員集団研修（7カ国12名）in 陸前高田 2014/11/1





仮設住宅の敷地で
各国の料理を振る舞う

海外での防災教育実践

2016年11月24日
インドネシア・バンダアチェ市の
高校生を招いての防災ワークショップ

アジアエ科大 Asian Inst. of Technology（お茶大協定校）
防災減災管理学術院での講義・演習



学校と防災 2015
（School and Disaster Risk Reduction）
インクルーシブ防災 2016
（Inclusive Disaster Risk Reduction）



ネパール・バングラデシュ出身の院生
「日本の学校だからこれだけ頑丈で、避難場所として機能し得たのだろう」





バングラディシュ
ネパールの院生の発言

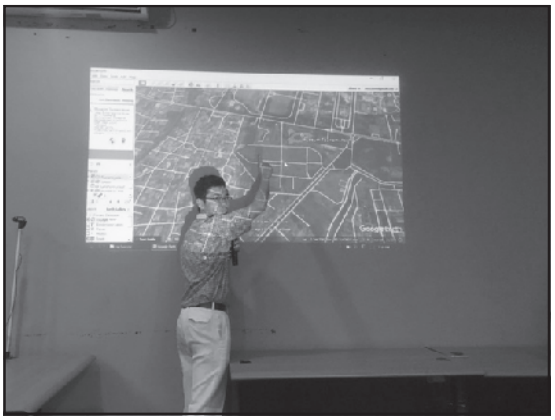
「教職員の防災教育・管理の能力を高めるソフト面での研修・育成は、限られた予算の中、現実的にまず実施できる有効な策だ。特に村落に住む自国の教員は、知識人として村人から信頼され指導的立場にあるので効果は大きい。ハード面でのインフラ投資との折衷が理想だ」

海外での防災教育実践

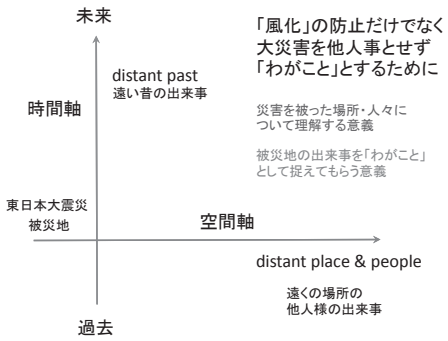
2016年11月24日
インドネシア・バンダアチェ市の
高校生を招いての防災ワークショップ

かつての大災害の被災地なのに，
災害を知らない世代へ





おわりに：（未）被災地間協働の実践の意義



支えられるということ
支えるということ

～陸前高田の6年間～

防災士
佐藤一男



2011年3月11日
東日本大震災 発生





多くのご支援に支えられた時間

- 水・食料
- 衣類
- 毛布・タオル
- 医療
- 炊き出し
- イベント
- 消耗品

支援の問題点



ご支援をいただく際の問題

- 時間を問わず届く
- 整理整頓が必要
- 使用期限があるものの管理
- 足りないものと多すぎるもの
- 支援格差
- 残った物の行き先

支援と受援(じゅえん)と仲援(ちゅうえん)

- 支援してくださる人がいなければ支援は始まらない。
- 受け取る体制がしっかりしていないと問題が発生する
- 支援を調整・仲介する体制がなければ支援は滞る。

支援する際のお願い

- 被災した状況、避難所の環境を考える。
- 被災した場所の状況を考える。
  地元消費のことを考える
- 正確な情報を確認する。
- いろいろな経験者の意見を聞いてから送る。
- 自分が使わない物は被災地でもいらない。
- 箱を開けなくても中身が分かるように送る。

受け取る側(受援)の問題

- もらって当然と思わない。
- 受け取り方に人間性がでる。
- ちょうど良い量では届かない。
- 我先に取ろうとするとトラブルになる。
- 弱いもの優先を心掛ける。
- 支援物資は、誰のものでもない。皆のもの。
- 平等と均等の問題。

物資の調整(仲援)は必須

- 置き場所
- 支援格差を減らす
- 被災から抜け出した時に「しこり」とならないように考えて行動する。

うばい合えば足らぬ　わけ合えばあまる。
相田みつを

支援と受援(じゅえん)と仲援(ちゅうえん)

- 支援する側は進歩したが、受援と仲援はなかなか発達しない。
- 災害の種類・規模によって必要な支援は変わる。
- いただく側というのは、発言が難しい。
- 仲援はマニュアル化が難しい。



心に残った支援

過去の大災害との違い

- ネットを使った情報発信
- 非営利活動法人（NPO）の進歩
- 迅速な個人支援
- 過去の災害支援の検証
- 個人情報保護法
- 福島原発の爆発（放射能）

東日本大震災の際に進化した支援

- NPOによる支援
- 女性対象支援
- 性的マイノリティー支援
- アマゾン欲しいものリスト
- ふんばろう東日本プロジェクト
- 復興市場

悩んだこと

- いつまで続けてもらえるか分からない。
- 支援依存者の発生
- 支援依存者と支援不要者の確執
- 度重なるアンケート
- 台本のあるインタビュー
- 過去の支援物資の確認

東日本大震災の
熊本地震の
実例として

熊本地震の避難所を見て



被災地からの脱出の問題

- 復興は資金の捻出がしやすい。
- もともとの地域の問題も復興に乗せている。
- 復興交付金の期限。
- 被災地自体の風化。
- 被災地でなくなることで、忘れられるという恐怖。
- 被災地からの人口流出。
- 新たな産業、雇用の創出。

部外者にできること

- 被災地という冠の無い陸前高田の魅力の発見と発信。
- 陸前高田に足りないものを見つけて、教えてください。
- つながりを継続してください。

- 万が一の時に被災しないでください。
- 万が一の時に助ける側になってください。

ご清聴ありがとうございました。

佐藤一男

（3）討論

実習報告会最後の討論、及び講演最後の全体討論では、国際学生フォーラムに参加している海外学生全員に一言ずつの質問ないしコメントの機会が与えられ、ゲストスピーカーの皆さんからご返答をいただくことができた。











